

れき ぶん

となん歴史民だより vol.33

Morioka tonan history and folklore museum

平成 25 年 2 月 19 日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228



企画展 都南の剣舞

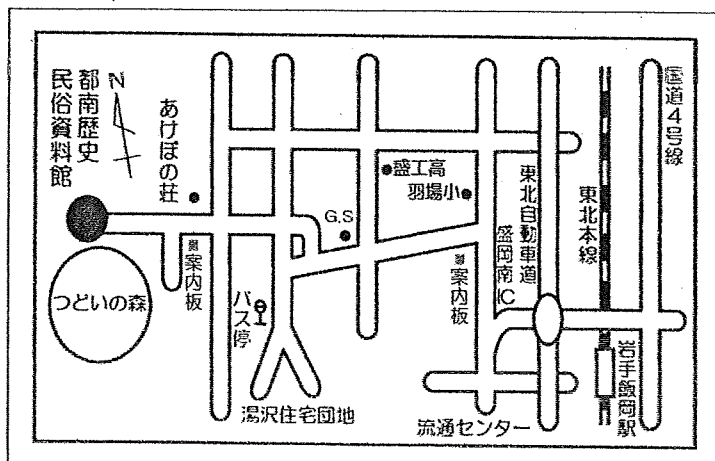
期間:平成24年10月19日~12月9日(終了)

是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

- ・当館館長 玉川英喜
「都南の遺跡 (その2)」
- ・盛岡市都南歴史民俗資料館の紹介
- ・資料は語る③
- ・盛岡市所在
指定・登録文化財紹介③
- ・となんの昔ばなし③

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無 料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
- 年末年始

都南の遺跡(その2)

盛岡市都南歴史民俗資料館 館長 玉川英喜

「となん歴史だより No.31」に続いて、盛岡市都南地域の遺跡の「その2」として、今回は縄文時代の「湯沢遺跡」、そして古代、奈良・平安時代の「百目木遺跡」「飯岡沢田遺跡」を取り上げます。

湯沢遺跡は、前回紹介の手代森遺跡と並ぶ縄文時代の代表的な遺跡であるとともに、手代森遺跡より約1500年位遡(さかのぼ)った時期のもので、縄文時代の移り変わりを窺い知るうえでも貴重です。

また、都南地域には、北上盆地の低・中位段丘上を中心に古代、奈良・平安時代の遺跡が数多く点在しています。この時代、都南周辺の歴史上の出来事としてよく知られているのは、803年の「坂上田村麻呂の志波城造営」、812年頃の「文室綿麻呂徳丹城造営」、さらには時代が下って1051年・1083年の「前九年・後三年の役」などがあります。都南地域にあるこの時代の遺跡からは、こうした出来事の歴史的背景となる人々の生活の様子、生産・集落の状況等々を窺い知るうえで貴重な資料がたくさん見つかっています。

なお、以下の記述にあたって引用・参考とした文献は次のとおりです。

- ・岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集「都南村湯沢遺跡」(1978年)
- ・同 第66集「湯沢遺跡発掘調査報告書(遺物編)」(1983年)
- ・都南村教育委員会「百目木遺跡発掘調査報告書」(1979年)
- ・岩手県文化振興事業団埋文調査報告書第418集「飯岡沢田遺跡第3次発掘調査報告書」(2003年)

【湯沢遺跡】

「湯沢遺跡」は、湯沢団地の宅地造成に伴って、昭和52年に調査が行われました。縄文時代の中期といわれる時期の大規模な縄文集落遺跡です。縄文時代は大凡1万年位にわたる時代ですので、大きく「早期」「前期」「中期」「後期」「晩期」の5つの時期に分けられます。「早期」の前に「草創期」を設けて6つの時期に分けることもあります。「中期」は今から大凡5千年から4千年位前の時期で、湯沢遺跡はその中期の終わり頃、4千年位前の時期のものが中心です。

湯沢遺跡からは160棟もの竪穴住居跡が見つっていますが、その約8割は縄文時代中期のもので、中期以外には前期と後期の住居跡があります。また、石器の材料となる剥片を貯蔵した住居跡も10数棟見つかっています。他にシカなどを捕るための落とし穴と考えられている跡が160余り、食料貯蔵などに使われたのではないかと考えられている断面フラスコあるいはピーカー状の形をした穴の跡が180余り見つかっています。遺物には、土器や石器の他、オカリナを連想させるような笛状の石製品やレリーフ様の線が刻まれた絵画的な石製品、さらには垂飾品や土製品など多彩な遺物が出土しています。縄文集落の在り方、生活の様子や精神文化の一端を垣間見ることができる貴重な資料がたくさん見つかっています。

【百目木(どめき)遺跡】

「百目木遺跡」は、国道4号から都南大橋に向かう道路の北側、北上川右岸の段丘上に広がる遺跡です。昭和53年に、ショッピングセンター旧ニチイの店舗建設にかかわって調査が行われています。この調査で竪穴住居跡80棟が見つかり、奈良・平安時代の大きな集落跡であることがわかりました。80棟の住居跡は、同時に存在したのではなく、遺物や住居跡の重複等から奈良時代から平安時代にかけての凡そ二百数十年にわたって営まれたと考えられます。

遺物の大半は古代の土器である土師器(はじき)や須恵器(すえき)で、住居跡から数多く出土しています。土器の多くは、食器として使われたツキ、鍋などとして使われたカメなどです。ツキにはロクロを使用してつくられたものと、不使用のものがあります。他に、鉄製の鋤(すき)先や刀子(とうす)、紡錘車(ぼうすいしゃ)、土製の紡錘車や勾玉(まがたま)などが出土しています。また、墨書が認められるツキも出土し、底部の文字は「最」と読みとれると報告されています。

都南地域に古代遺跡が多く存在することはそれまでにも知られていましたが、この調査によって、古代の集落の

実態、日常生活や生産の様子などをより具体的に窺い知ることができるようになりました。百目木遺跡は、都南地域における古代集落跡の本格的調査の先駆的な意味をもった貴重な遺跡ともいえます。

なお、百目木という地名について、発掘調査報告書は「水の音を形容した地名(柳田国男 1968)」を引用したうえで、「百目木という字名は都南村(当時)に、当遺跡所在地の他に永井、上羽場、大ヶ生の4ヵ所認められる」と紹介しています。

百目木遺跡については、平成に入ってから宅地造成などに伴って何度か調査が行われています。

【飯岡沢田遺跡】

「飯岡沢田遺跡」は、盛岡南新都市計画整備事業いわゆる盛南開発に伴って調査が行われました。数次にわたる調査が行われましたが、ここでは平成13年度に県埋蔵文化財センターが行った第3次調査を中心に紹介します。

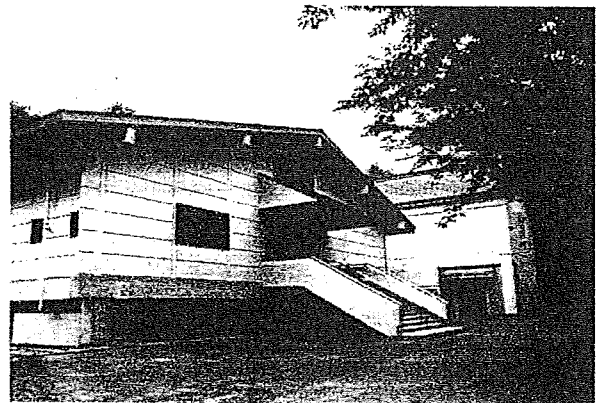
この調査で注目されるのは、古代の住居跡の他に、古墳・円形周溝等が40基余り見つかったことです。発掘調査報告書に「飯岡沢田遺跡周辺では、現在(調査時)に至るまで500棟を超える古代の大規模な集落跡(台太郎遺跡など)が検出されいながら、当時の墓域だけは未確認のままであったが、今回の調査結果において、古代の集落跡と大規模な墓域が混在した遺跡であることが明らかになった」と報告されています。見つかった古墳・周溝の約3分の2は奈良時代末から平安時代にかけての8世紀末から9世紀代、残りの古墳・周溝も大半は平安時代(9世紀)のものと考えられています。また、9世紀後半から10世紀初頭と考えられる焼骨片が納められた骨蔵器も見つかっています。他に3ヶ所から火葬骨が出土しています。火葬骨周辺に焼土は見られなかったことから、別の場所で火葬されたあと埋葬し直されたと推定されています。

古墳・周溝からの遺物量も比較的多く、1基から須恵器長頸瓶7点が出土した古墳や蓋付きの薬壺型土器が出土している古墳もあります。長頸瓶の1点には底部に丸い穴があいていました。また、丁寧な造りの土師器や須恵器のツキなどが多数出土しています。

この遺跡からは、古墳・周溝や多くの遺物、さらには骨蔵器や火葬骨の検出等々、古代の葬送儀礼を窺い知ることができる貴重な資料がたくさん見つかっています。

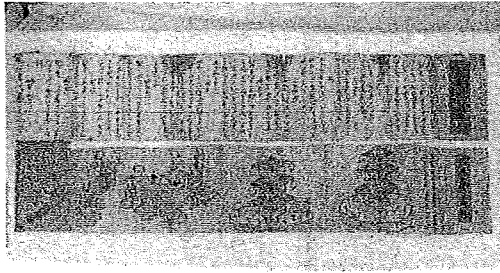
盛岡市都南歴史民俗資料館の紹介

盛岡市都南歴史民俗資料館は、昭和54年(1979)に都南村歴史民俗資料館として開館しました。昭和63年には新館が増設され現在の姿になりました。その後、平成4年(1992)に盛岡市と合併し盛岡市都南歴史民俗資料館となりました。平成26年度で開館35年を向かえることとなります。そこで、今回は全国的に「歴史民俗資料館」が建設される時代背景をもとに当館を紹介したいと思います。



当館のような歴史民俗資料館は全国各地にあります。それらが建設されるきっかけは約50年前に遡ることができます。まず、昭和41年(1966)明治100周年記念事業準備会議での「歴史民族博物館の建設」構想にはじまり、昭和45年(1970)からの歴史民俗資料館への国庫補助支出による振興策、昭和52年(1977)文化庁文化財保護部「市町村立歴史民俗資料館の設置・運営のあり方」が示され、高度経済成長にともなって急速に変化・解体する社会に対応し、地域の文化的・歴史的資料の散逸を防ぐ目的で建設されました。そして、これらに拍車をかけたのは故田中角栄元首相が昭和47年(1972)に発表した「日本列島改造論」でした。

こうした施策により、基盤自治でも文化振興政策が目まぐるしく展開されます。当館もそのような時代のなかで建設されました。現在当館の入館者は開館当初のように多くはありません。文化振興政策も往時のように花形でもありませんが、当館は開館当初の理念を掲げ、今後も地域のために貢献する資料館でありたいと思います。

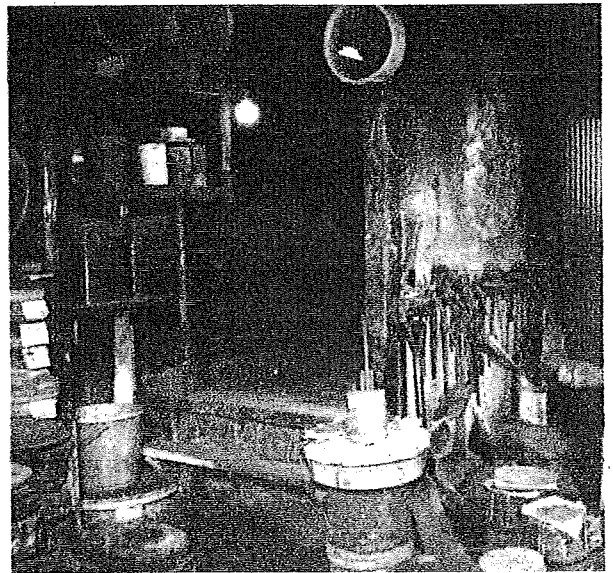


【大念佛巻物】

念仏剣舞といえば、国指定無形民俗文化財の永井の大念仏剣舞が有名です。このほかに県指定無形民俗文化財の上鹿妻念仏剣舞や市指定無形民俗文化財の手代森念仏剣舞、高江柄念仏剣舞がありますが、かつてはこれ以上に念仏剣舞が存在していました。

大念佛巻物は、津志田念仏剣舞が所有していた巻物です。表紙には巻物と記載されていますが、形態は折帳となっています。これが書かれた年代は、資料中に万治元年とあることから西暦1658年以降に書かれたものであることがわかります。

現在、当館に所蔵される大念佛巻物は、念仏剣舞の由来となった梅若伝説や当時の念仏剣舞の様子が描かれています。その絵からは、江戸時代から現在にいたるまで踊りで使用する道具が変わっていないことがうかがわれます。念仏剣舞を研究するにあたって、とても重要な資料といえるでしょう。



溶鑪一式

江戸時代から伝統工芸として継承されてきた南部鉄器製作にかかる鑄造設備のひとつで、溶解作業時に火をおこすために風を送る装置です。明治17年(1884)11月の盛岡大火で類焼した後、翌18年(1885)に盛岡藩御用職人の家柄である鈴木主善堂の再建された工房内に構築され、昭和初期まで使用されていました。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

『見えなくなった仏さま』 となんの昔ばなし三十三

今から千五百年(原文のママ/本来千二百年程前)ほど前、慈覚大師という偉い和尚さんがおりました。この和尚さんの名前を円仁といひ下野国の生まれで、伝教大師(最澄)の弟子でした。全国を歩き仏の教えを広めていました。東北地方には二度まわり、たくさんのお寺を開いた方です。

慈覚大師はある年、坂上田村麻呂の遺跡をたずねながら、仏の教えをといて、東北の山野を旅し、飯岡にたどりつきました。

この辺りは、蝦夷と(エミシ)と田村麻呂の兵との激しい戦いの場だったので、戦死した亡者の霊をとむらうために山道をのぼりました。

山頂には瑞雲がたちのぼり、山腹に奇岩のある飯岡山を慈覚大師はこのほか気に入り、ここに住むことになりました。そこで、山頂には戸隠明神をまつり、ふもとには地福院という寺を開いて、三尺三寸の千手観音を彫刻し、仏の教えを広めました。

地福院は、その後五、六百年たつて万福院と名をかえましたが、いくども火事にあい、廃れ果てて現在ではその跡しか残っておりません。

ある火事のときのこと、千手観音が見えなくなったので、和尚さんをはじめ村の人々が探し回りました。しかし、どうしても見つかりませんでした。「焼けてしまったか?」とガツカリしていると「やぶ谷地」という所が、毎夜、光明で輝く」といふ噂を耳にしました。さっそく、谷地の中を探してみると千手観音が見つかりました。それから、そのあたりを「やぶ谷地」「万福谷地」と呼ぶように